

Menopause 関連文献

以下に挙げる文献は、Abstracts in Social Gerontology (the National Council on the Aging, Inc, SAGE Periodicals Press, Vol.33~39, 1990~1996) と age network の検索によって得られたものである。文献の大部分が医学的なものであったが、ここでは主に、社会科学文献を収録する。社会科学文献は全体のほぼ3分の1である。

- | | |
|-----------|-----|
| 1.更年期一般 | 12本 |
| 2.理論的研究 | 11本 |
| 3.実践的研究 | 23本 |
| 4.その他 | |
| (1)ホルモン療法 | 2本 |
| (2)男性更年期 | 1本 |

1.更年期一般

Butler, Robert; Lewis, Myrna I.; Hoffman, Eileen; Whitehead, E. Douglas
Love and sex after 60: how to evaluate and treat the sexually-active woman
Geriatrics, Vol.30 No.11, Nov, 1994, 33-42

性的に活発な女性の評価と取り扱いについて述べられている。幼児期の性的虐待を含めた早い時期の性的体験は、その後の人生における女性の性に影響を与える。医者は、失禁について患者に尋ねるべきである。効果的な処置は、ホルモン療法やカーゲルエクササイズ (Kegel exercise) や生体自己制御などである。乳房切除は、セクシャリティーの減退を引き起こしうる。ホルモン療法は、更年期の症状に対処するものであり、骨粗鬆症やアテローム性動脈硬化のような高齢になったときの病気を予防する。ホルモン療法は個々の患者の必要性に対応できるようにしなければならない。子宮を摘出したり卵巣炎にかかった女性達は、テストステロンの投与によって症状が軽くなる。医者は、高齢女性患者とのセクシュアリティについて親密で開かれた討論をすべきである。

Callahan, Joan C., ed.
Menopause: a midlife passage
Bloomington: Indiana University Press, 1993

ケンタッキーとオハイオ出身の中年女性のグループが、お互いに更年期についての理解を深めるための討論グループを組織し、①最近の情報普及のためのフォーラムを設ける、②更年期を女性の人生の医学的イベントとする事に向けた流れを助ける、③更年期の経験についての新しい学術的な研究を奨励するための会議であるときに、全盛を極める。別の論文は、1989年の会議で、その本の中心となることを発表した。これには、更年期や中年女性についての個人的、社会的な見解を申し入れる、様々な背景を持つ女性達による発表も含まれている。論文には、①更年期の生理学、②文化的・個人的見解、③自然な過程の医学的見解、④ホルモン交換療法 (hormone replacement therapy) への反対意見、⑤映画の中の中年女性の説明、⑥更年期に関する道徳的・政策的問題がのせられている。

Cone, Faye Kitchener
Making sense of menopause: over 150 women and experts share their wisdom, experience, and commonsense advice
Simon & Schuster, New York, NY, 1993

このガイドブックは、150人の女性や専門家からの経験やアドバイスなどの更年期に関する情報が載せられている。女性が健康に十分注意することや、更年期のような変化について肯定的な態度をとることが強調されている。更年期とは何か、それはいつ起こるか、

その兆候を測るテスト、更年期付近になると何が起こるのか、卵巣機能の低下、体熱感、性器の乾燥、情緒的变化などが取りあげられている。更年期後については、骨粗鬆症や心臓病、ホルモン療法、同種療法や中国の漢方薬のような様々な処置、栄養やエクササイズやビタミンのような様々な手当、性、更年期による手術や高齢出産などのような特別な問題、男性と更年期、更年期クリニックのリストを含めた良い処置の仕方、そして女性がどのように加齢について思っているか、ということなどがあげられている。付属資料として、男性が更年期について知っておくべきことや更年期についての文献、ニュースレター、雑誌などが載せられている。

Culter, Winnifred B., and Celso-Ramon Garia

Menopause: a guide for women and the men who love them rev. ed.

New York: W. W. Norton, 1992

本研究は、成人女性とそのパートナーに対する、更年期がもたらすライフスタイルと体の変化に指針を与えるものである。どのようにそしていつそれは起こるのか、ほとんどの女性によって感じられる兆候、ホルモンのレベルに対して何が起こるのか、身体の変化、ホルモン療法 (hormone replacement therapy)、セクシャリティなどが取りあげられている。また、心臓血管の健康、栄養、喫煙と肥満、運動、ホルモン療法に対する代案に関する5つの章が含まれている。女性が自身の健康のケアを保つためのチェックリストが載せられている

Greer, Germaine

Change: Women, aging, and the menopause

A. A. Knopf, New York, NY, 1992

フェミニストの視点から、更年期と加齢の身体的・情緒的な影響について受け入れられている考えに対する挑戦をする。過去2世紀に渡る更年期と加齢についての考えの発展の跡を辿るために、医学的、歴史的、人類学的、文学的などの文献から考えを得ている。女性に自分自身の健康に責任を持つことや、受け入れられている真実に疑問を投げかけることを勧めている。最近の更年期を扱った研究は、ホルモン療法に代表して高く評価された約束を変化させている。伝統的そしていろいろな非医学的な処置を探索している。更年期の女性での情緒的そして身体的変化を全体的に徹底的に調査し、それぞれの女性の経験についての受け入れに基づいた加齢の新しい「技術」を提案している。生来の自由を受け入れることと、最も永続的な結果であり得る安らかさと力を持つことを奨励している。

Gullette, Margaret Morganroth

Menopause as Magic Maker: Discursive Consolidation/Strategies for Cultural Combat
1994, 17, 1, fall, 93-122

1992~93年にかけて、更年期についての論文が増加したことについて論じる。女性の人生を更年期前と更年期後という2分割を行っている古い論文の再統合を検討する。多くの女性にとって更年期は主要なライフイベントではないと提案している。更年期に起こる問題の解決としてのホルモン療法の効果が議論され、女性の身体に薬を投与することに対する戦略が探求されている。

Lark, Susan M.

The menopause self help book: a woman's guide to feeling wonderful for the second half of her life.

Berkeley, CA: Celestial Arts, 1990

この本は、更年期のもたらす結果の扱い方を知りたい女性のためのハンドブックである。5千万人のアメリカの女性が40歳以上で、そのために更年期の症状を経験することによって傷ついている。これらの女性の多くは健康状態の悪化を経験し、それらを再び経験するかも知れない。更年期の短期的な症状のいくつかは、性器の乾燥、不規則に起こる重度の

出血、不眠症、短気、心配性、うつ状態というものである。長期的な健康上の問題は、骨そしょう症、乳がんと子宮がん、心臓病である。このハンドブックは、栄養を取ったり、ストレスを減らすエクササイズをしたり、散歩やジョギングや水泳やゴルフやテニスやサイクリングといった一般的な養生法を推奨している。

Mitteneess, Linda S.

Historical Changes in Public Information about the Menopause.

Urban Anthropology, 1983, 12, 2, summer, 161-179

主要な文献における更年期の共通のイメージは、生物学的機能と社会的価値の喪失の時期であるというものである。多くの著者は、更年期をこのように見るのは、古くはビクトリア朝の時代から一致したものであろうと推測している。しかし、1900年から1976年までのアメリカでの主要なメディアに見られる更年期の記事の分析は、そうではないことが明らかにした。1950年以前では、更年期は肯定的・否定的両方の評価があり、医学的介入を要しない正常な生理的な出来事であると見なされていた。その上、更年期は女性の人生における新しく静かな時期の始まりとして見なされていた。しかしながら、1950年代で変化し始めた。セクシャリティや若さの喪失という言い回しが増加してきたのだ。1960年代は、ネガティブな見方が増加したように見受けられる。1960年代以前は、素人向けの雑誌の記事は、つらい更年期のためのエストロゲン療法だけが勧められていた。1960年以降は、マイルドな症状に対しても勧められるようになった。

Notelovitz, Morris, and Diana Tonnessen

Menopause and middle health.

New York: St. Martin's Press, 1993

更年期は50歳前後でやってくる一方、そこに至る変化過程は30代前半に始まり、肉体的変化はその後少なくとも15年は続く。この本は、女性が快適な更年期を過ごし、更年期以後を健康的に過ごす準備をするために必要な情報を与えるためのものである。パート1では、加齢と更年期について、またその健康に与える影響について理解をする。パート2では、更年期の医学の原理を教え、これらの概念を日常生活にどのようにあてはめるかを指示する。パート3と4は、月経前症候群、中年期の妊娠、避妊、更年期などの女性が直面するかも知れない問題を解決するセクションである。パート5は、ホルモン療法の危険性の最近のデータや、女性が更年期後にホルモン療法を受けるかどうかの決定をするのを助ける情報を提供している。

Safran, Claire

What women want men to know about menopause

New choices for retirement living, Vol. 33 No. 2, Mar, 1993, 14-17

女性は夫の医学的な状態のあらゆる側面を知っており、彼らがとるアスピリンについてさえ知っているが、ほとんどの男性は更年期の過程についての理解がない。多くの場合、夫は妻がエストロゲン補給をしていることを知らない。女性は職場の男性に更年期の症状についてもっと言うべきかどうか決められないでいるが、家でもそうである。いったん彼女たちが情報や感情が通じ合えば、加齢と共に来る変化に対する心配やサポートを分かち合うことができると考えているカップルもいる。

Sand, Gayle

Is it hot in here or is it me?: A personal look at the facts, fallacies, and feelings about menopause

Harpercollins, New York, NY, 1993, 1st ed.

著者は、初めてほてりを感じた時のことや彼女が更年期の時に医者や鍼師やマッサージ師など様々な専門家にかかった3年間について否定的に考えていたことを思い出している。エストロゲン療法を受けることに反対し、彼女は健康を維持するためにダイエットや

エクササイズなどに積極的にアプローチした。結局、彼女は骨粗鬆症や心臓病などを予防するためにエストロゲン療法を受けることにした。リビドーの喪失に直面し、彼女はテストステロンを補給してエストロゲンを取るという処置に変えた。更年期は雰囲気や態度の変化によって特徴づけられるぎこちない加齢の時期であるが、彼女は新しい冒険に発つ機会を歓迎していると結論づけている。

Sheehy, Gail

Silent passage: menopause

Randomhouse, New York, NY, 1992

更年期のスティグマをぬぐい去り「普通の身体的プロセスにする」ための研究である。著者は、彼女の更年期の経験についてフランクに書き、闇の中で長く悩んでいる女性のフラストレーションを明らかにしている。欧米の最近の論文を見直し、女性の選択の自由とリスクが評価されている。更年期を「第二の成人期への抜け道」であることが強調されている。更年期に近い時期、ホルモン療法、更年期に対する医師の態度、セクシャリティー、更年期の症状、更年期に伴う心理的变化が、個人的な体験と共に描かれている。

2. 理論的研究

Brown, Judith K.

Cross-Cultural Perspectives on Middle-Aged Women

Current Anthropology, 1982, 23, 2, Apr, 143-148

いくつかの比較文化的研究は、西洋以外の国の女性は出産期が終わると、制限からの自由や権威の増大や達成のための機会の増大などの肯定的な生活の変化を経験するとしている。異なった社会でこのような変化に多様性があることとそれが肯定的であることの理由が検討された。精神分析学・社会生物学・人類学の研究が見直され、不完全さが見いだされた。母親と成人子の関係に焦点を当てた説明がなされている。

Carolan, Marsha T.

Beyond deficiency: broadening the view of menopause.

Journal of Applied Gerontology 13(2):193-205, June 1994

更年期についての伝統的な医学的見解、高齢女性についての文化的ステレオタイプ、習慣が更年期についての誤解を生んでいる。更年期についての最小主義者 (minimalist) の見方は、この段階は自然なプロセスであると見なす。対照的に、最大主義者 (maximalist) の見方は、更年期を、女性にとって様々な健康についての結果を持つ大きなイベントであるという病的な見解を示す。最小主義者の見解からは、もし女性が更年期に対して困難な経験をすれば非難されるべきである。一方、最大主義者の見解からは、女性は健康の崩壊を経験しているかのように扱われる。更年期に関するこれらの対立する見解は、①更年期の時期、②社会的環境と役割、③社会文化的な態度に影響を及ぼす。更年期の見方を広げることは、更年期の女性に対する資源とサービスを柔軟化するための包括的な調査を必要とするだろう。

Griffen, Joyce

A Cross-Cultural Investigation of Behavioral Changes at Menopause.

The Social Science Journal, 1977, 14, 2, Apr., 49-55

人間関係のファイル中の、カテゴリ-886「老年」からのデータが、関連する2つの仮説を検討するために使われている。2つの仮説とは、①初潮時に行われる儀式を研究している人類学者は、更年期における儀式とその内容についても記録している。②そのような儀式を行わない文化では、更年期やその後起こる行動的变化が受容されるということ

を示している。更年期における行動の変化の一つは、それ以前の社会活動からの引退であり、もう一つは社会的または超自然的世界の秩序喪失である。データと質問の欠如が将来の研究に課題を残している。

Hendershott, Anne B.

Menopause as Status Passage: A Cross-Cultural Analysis.

North Central Sociological Association, Association Paper, 1986

健康の専門家の視点、加齢について、社会学・心理学・人類学の最近の文献の検討によって、更年期の経験の違いを分析した。更年期は、Glaser & Strauss(1971)によれば、地位の変化の時期とみなされている。更年期症候群の現象は、比較文化的に見ると、一貫していない。近代化の程度により、文化ごとに女性の更年期の経験は異なっている。生物学的変化と身体に加齢に加え、多くの社会過程を経験しているのである。更年期が、以前は女性には無かった新しい役割の期待を与える文化もある。これは、変化を容易に行うための助けになる。文化は、どのように更年期女性が自分自身を定義づけ、対処するかと共に、どんな症状を他者に表されるのかを規定する。

Kaufert, Patricia A.

Myth and the Menopause.

Sociology of Health and Illness, 1982, 4, 2, July, 141-166

更年期の経験について2つの対立する見方がある。一つは医療専門家によるものであり、もう一つは女性の健康についての運動で言われているものである。Roland Barthesの定義を用いれば、これらの異なった解釈は神話として扱われる。神話は社会の産物として見られており、現代の神話はブルジョアジーの価値を反映している。これらの神話の検討を通して、医療専門家とフェミニスト団体による女性（特に高齢女性）の見方について検討する。

Kaufert, Pat; Syrotuik, John

Symptom Reporting at the Menopause.

Social Science and Medicine, 1981, 15E, 3, Aug, 173-184

現在は、どのような症状が経験されるのかについては問題がある。理論的な問題点について研究する学者の失敗によって、混乱が生じている。それは、①多様で異なる症状のリストが非常に多くの結果を引き起こす。②更年期の心理的ディストレスの存在や欠如に関する主張がなされてきたが、心理的な病的状態の尺度が適切なものではなかった。③症状の認識や報告についての文化的要因の大きさから生じるバイアスにほとんど注意が払われてこなかった。これらの点については、先行研究に基づいて議論されている。

Lancaster, Jane B., and Barbara J. King

An evolutionary perspective on menopause

Kerns, Virginia, and Judith K. Brown, Eds.

In her prime: new views of middle-aged women, 2nd ed.

Urbana: University of Illinois Press, 1992

本研究は、更年期はライフサイクルの中で非生産的な面を促進する発展したパターンなのか、それとも出産可能年齢の間によりよい健康を選ぶというプロセスの偶然的副産物なのかという問いを検討した。発展したパターン理論 (evolved pattern theory) の支持者は、子どもを生むのをやめ、彼女の最後の出産と孫に対して投資することによって、女性は出産の成功を最大化すると述べる。他の理論の支持者は、それよりむしろ、長寿、健康、出産可能であることを好むという。これらの2つの理論を比較することのメリットが評価され、女性の人生経験についての最近の歴史的变化が注目される。多くのデータが、現代社会での更年期の経験は過去におけるそれとは異なっていると述べている。

McCrea, Frances B.

The Politics of Menopause: The "Discovery" of a Deficiency Disease.

Social Problems, 1983, 31, 1, Oct, 111-123

エストロゲンが広く使われるようになった1960年代に、それ以前は罪やノイローゼの印と見なされていた更年期を、医師は欠陥病(deficiency disease)と再定義した。更年期を避け、若さと美しさを保つ方法の一つとして、医師や薬剤師によって奨励されたエストロゲン療法は、1970年代半ばに、がんや他の健康上の問題を引き起こすとされた。フェミニストは、更年期は正常な加齢のプロセスであり、女性のヘルスケアは社会的問題であると言う。更年期についてのこれらの対立する定義がどのように発展するのかについて、病気のレッテルを貼られているスティグマを取り除こうとする女性の努力について検討されている。

O'Toole, Richard; O'Toole, Anita W.

Menopause: Analysis of a Status Passage.

Free Inquiry in Creative Sociology, 1988, 16, 1, May, 85-91

Status Passage Theory(Glaser & Strauss,1971)が、更年期の複雑な定義を分析するために用いられた。更年期を処置が難しいものであるとする医学的定義が、普通で正常なものであるとするフェミニストの定義と比較されている。この理論による構造的分析を行う際には、社会問題と、その解決方法に関する異なった社会運動の間での葛藤を考慮しなければならない。

Posner, Judith

It's All in Your Head: Feminist and Medical Models of Menopause (Strange Bedfellows)

Sex Roles, 1979, 5, 2, Apr, 179-190

更年期に関する研究は不十分であり、決定的なものではない。奇妙なことに、医療機関の立場からとフェミニストの立場からの研究は、同じ様な源泉をもつ。すなわち、両方とも更年期に女性が経験する苦難は生理的なものよりも心理的なものから来ると述べている。婦人科医は、女性は彼女の女性としての役割を受け入れないことを非難し、その一方でフェミニストは、この現象を社会のせいにしてている。しかし、両者とも生理学的変化の重要性を認めていない。更年期は文化的、心理的、生物学的要因の相互作用の複雑なプロセスであるといわれている。

Young, Lawrence A.

Premature Menopause as an Inconsistent Role Cue Leading to Psychological Stress: An Extension of Social Consistency Theory.

Society for the Study of Social Problems, Association Paper,1979

更年期の社会文化的意味についての文献がレビューされている。このレビューに基づくと、更年期は、あるステージから別のステージへの移行を示すものとみなされている。早すぎる更年期(35歳以前に起こる更年期)は、若い女性についてのルールの矛盾を示している。社会的一致理論(the theory of social consistency)は、早すぎる更年期が、心理的ストレスをもたらすという結果を導き出している。データは、the National Center for Health Statisticsによって行われた健康調査によって得られた。調査の結果は、早すぎる更年期の経験は心理的ストレスの程度が顕著に高くなるという仮説を棄却した。

3. 実証的研究

Amundsen, Darrel W.; Diers, Carol Jean

The Age of Menopause in Medieval Europe.

Human Biology, 1973, 45, 4, Dec, 605-612

ヨーロッパにおける初潮年齢（13歳）が、19世紀以後年少化する傾向にあるといわれる。先行研究では、古典時代や中世には、初潮年齢は約13歳から14歳であり、今と変わらない。6世紀から15世紀のヨーロッパにおける更年期の年齢に焦点を当てた残存する文献をレビューしたところ、更年期年齢は50歳に起こるとしている文献が最も信憑性があり、それは20世紀における年齢とだいたい一致している。

Barnett, E.A.

Notes on nervios: a disorder of menopause.

Health Care for Women International 10 (2/3):159-169, 1989

Nervious（神経質）という言葉は、多くの国で明らかに心理学的な意味を持っている。普通、それはディストレスや心配な症状を指す。ペルー人の小さな村では、神経質という言葉は女性の年齢と関係した意味を持っている。もし若い女性なら、その状態を一般的に高血圧のせいにしてしている。そのような症状を持った更年期の女性は、神経質という無関係の情緒的な不適応を持つと考えられている。神経質な人は、精神安定剤を飲むように言われる。若い女性は血圧を下げる錠剤を飲む。男性は高血圧にはなるかもしれないが、神経質にはならない。神経質で悩む女性は重要な社会的、心理学的利益を得る。すなわち、病中は夫から妻への支配権の移動が起こるのである。例えば、金銭的支配が起こり、プライバシーが守られ、家族の構造が維持される。

Berkun, Cleo S.

In Behalf of Women over 40: Understanding the Importance of the Menopause.

Social Work, 1986, 31, 5, Sept-Oct, 378-384

40～55歳の身体的にも精神的にも健康な60名の白人女性に対するインタビューの結果を分析している。加齢の認識と外部要因（特に更年期）の相互作用が、女性の情緒的状态に与える影響について注目している。主要なテーマは、身体が悪化に対する恐れ、知識の欠如、更年期についての十分な情報の不足、自分自身の行動をコントロールできないことに対する罪の意識、である。結果は、更年期は普通の出来事であり、破壊的なものではないという概念を支持するものであった。しかしながら、多くの女性は、自分の体がコントロールできなくなることを心配していた。

Beyene, Yewoubder

From menarche to menopause: reproductive lives of peasant women in two cultures
State University of New York Press, Albany, NY, 1989

2つの国の農家女性における更年期について調査するため、比較文化的な民族誌の研究を行った。調査は、メキシコの田舎に住むマヤ系インディアンの女性とギリシャの田舎に住むギリシャ人女性に対して行われた。調査は、どの調査地においても一年以上に渡り参与観察、国勢調査、情報提供者とのインフォーマルなインタビュー調査が行われた。調査対象者は、33歳から57歳までの107名のマヤ人女性と38歳から59歳までの96人のギリシャ人女性であった。結果は、更年期についての認知や経験は文化ごとに異なっており、役割の継続性、地位の獲得、月経のタブーがないというような文化的要因が女性の更年期の経験における多様性の説明には不可決であることが明らかになった。社会的な役割の制限や月経の文化的なタブーの他に、発展途上国の女性は、出産のパターンに強い類似性を持っていた。更年期についての調査は、環境、食生活、出産パターン、女性の身体のホルモンの分泌に影響を与えうる運動のような生命文化的な要因を考慮しなければならない。

Bonilla Becerra, Nelsy; Quintero Zurek, Maria Claudia; Vela Ortega, Claudia Felisa
Attitudes of Women toward the Experience of Their Sexuality during Menopause

Revista Latinoamericana de Sexologia, 1991, 6, 2, 167-181

女性のセクシャリティに関する更年期後の態度を形成する要因についての研究である。コロンビアに住む100名の女性に対するインタビューに基づいて行った更年期後の性的経験を測定する質問によって分析した。社会経済的地位の高い女性は、低い女性よりも性的欲求や興味に対して好ましい態度を取っている。年齢、学歴、母性、更年期の時期などは有意な変数ではなかった。

Cate, Mary Ann, and David E. Corbin

Age differences in knowledge and attitudes toward menopause

Journal of Women and Aging 4(2):33-46, 1992

更年期についての知識や態度を測るために研究がなされてきたが、両者の関連についての研究は見られなかった。本研究では、更年期についての知識や態度について年齢がどのように影響しているのかを調査した。350の質問が、ネブラスカの都立病院とシニアセンターのスタッフと患者である19歳から92歳までの女性に対して与えられた。回答者は、更年期前、更年期に近い時期、更年期後という段階によってグループ分けされた。高齢女性は、若い女性よりも更年期に対しての知識が少ないが、より肯定的な態度を持っていた。更年期に対する態度は、明らかに自己認識している健康状態、更年期に対する母親の態度の自己認識、加齢に対する態度に関連していた。

Chirawatkul, Siriporn; Manderson, Lenore

Perceptions of Menopause in Northeast Thailand: Contested Meaning and Practice

Social Science and Medicine, 1994, 39, 11, Dec, 1545-1554

タイの南東における更年期についての認識が、村での参与観察、35歳から55歳までの150人の女性から得られた調査結果、更年期に近いか更年期を過ぎた23人の女性に対するグループディスカッションとインタビュー調査によって調べられた。一般的に、更年期は普通の生物学的イベントとして捉えられている。認識される生理学的経験や、更年期の心理学的・社会的意味、健康を求める行動の結果が、回答者の間で明らかに異なっていた。82%の女性が更年期を、月経についての心配からの解放から妊娠からの解放までに広がる明らかな利点を持つものとして見ている一方で、若さを保とうとする対立した欲求もまた感じている。保健専門家は、更年期を病的なプロセスであり治療すべき状態としてみなしがちである。

Conboy, Lisa, A.

Occupation and Menopause Experience

American Sociological Association, Association Paper, 1996

更年期についてのニュースレターに載せられる1206人からの手紙が分析対象である。対象者は医療の専門家、医療以外の専門家、主婦という3グループに分けられた。雇用されていない主婦は、更年期に起こる家族的・情緒的変化にストレスを感じていた。医療以外の専門家は、身体的な症状にストレスを感じていた。医療の専門家は、この定義されるような変化が必要であることにストレスを感じている。

Conboy, Lisa, A.

Self-Reported Attitudes towards the Menopause: A Textual Analysis.

American Sociological Association, Association Paper, 1995

更年期についてのニュースレターに載せられる1207人からの手紙が分析対象である。女性の職業についての分析で、グループ間で興味深い違いが見いだされた。グループは医療の専門家、医療以外の専門家、主婦に分けられ、更年期の経験の認知について分析された。最も重要な相違は、医療の専門家と医療以外の専門家に認められた。

Crawford, Marion P.; Hooper, Douglas

Menopause, Ageing, and Family

更年期は、役割変化を含む心理社会的移行の時期である。106人の女性から得られたデータが、この個人的・根本的な生理学的出来事とその他の個人的プロセス（健康度、年齢、性など）と家族過程との間の関連性を検討するために使用された。106人の対象者のうち、63人が祖母になろうとしていた。平均年齢は49歳であった。データはインタビュー調査を通して得られた。更年期は、主観的健康や性とは関連性が見られなかったが、年齢とは関連性があった。報告された更年期の経験に関しては、親期の終了後特に娘が嫁いだ後、孫がいる世代よりもストレスを感じやすい。更年期の経験は現代の神話よりもずっと容易なものであるというのが一般的な結果である。

Cross, Sandra K. ; Lovett, Joseph E.

Women's collective meanings of menopause: a content analysis

Journal of Women and Aging, Vol.6 No.1-2, 1994, 187-212

女性自身の更年期の経験の認知を検討しカテゴリー分けするために、実地調査での分析が行われた。データは、更年期前、更年期中、更年期後の25歳から65歳までの101人の学歴が高く、高収入の女性を対象にした調査より得られた。質問は、更年期に対する態度の主な関連要因、情報源、個人的経験、生活に対する更年期の影響について着目している。全ての回答は、肯定的、否定的、中性的という3つにカテゴリー分けされた。結果は、7つの尺度（身体的、社会的、情緒的、ライフサイクル、心理的、精神的、職業的）のうち約半分が、更年期についての身体的なテーマと関連していることを示した。主題に関わる言及の約4分の1が社会的な尺度についてのことで、18%が情緒的な尺度と関連していた。グループ間や個人の間で、更年期について有意な差は見られなかった。明らかなる発見は、全体的に女性は、情緒的な尺度を除いて全ての尺度において肯定的か中立的な感情を持っているということである。最も一致したテーマは、更年期という生物学的出来事が、彼女たちの全体的な健康状態や生活の全体的な質に大きな影響を与えていないということであった。

Daly, Jeanne

Caught in the Web; The Social Construction of Menopause as Disease

Journal of Reproductive and Infant Psychology, 1995, 13, 2, Apr-June, 115-126

150人の女性に自分自身の更年期の経験についてインタビューを行った結果を報告する。個人的経験、家族の状態、社会構造、文化の間の相互作用を見いだしている。更年期の時に生活に支障をきたすほど深刻な症状があった女性は、それはうつ状態のせいであると考えており、身体的・家族的・社会的要因が絡んでいると考えていた。これらの女性にとって、このような更年期の症状によって良い処置を受けねばならなくなる。同時に、正常な社会的移行としての更年期は、深刻な問題に悩んでいない女性の経験によって説明される必要がある。

Davis, Dona Lee

Newfoundland change of life: insights into the medicalization of menopause

Journal of Cross-Cultural Gerontology, Vol.34 No.1, Jan, 1989

カナダの漁村で調査をすることによって、カナダにおける更年期の民族の見方について検討する。この村では、更年期は他とは異なったものとは見られていない。加齢は、誕生に始まる過程であり、年齢は女性を「変化しているもの」として規定するために使われている。中流階級の女性は、更年期を新たな出来事として定義づけようとしている。しかし漁村女性は、更年期を閉経、出産可能時期の終わり、社会的文脈における重要性の喪失とはみなさない。更年期は普通のこととして考えられている。女性の間での相互作用、広範な社会的ネットワーク、親密な個人的つき合いを支配する平等主義と禁欲主義の価値観が、彼女達の態度形成に関連している。

du Toit, Brian M.

Aging and menopause among Indian South African women.

SUNY Series in Medical Anthropology.

Albany: State University of New York Press (発行年不明)

これまで、比較文化的な視点から、特に発展途上国での加齢と更年期に関する研究はあまりなされてこなかった。本研究は、南アフリカの女性に関する研究である。半数は更年期前、残りは更年期後の56人の女性を取りあげた。結果は、南アフリカのインド人女性の役割が、最近重要な変化をしていることが分かった。少女は初経の年齢にはもはや孤独ではなく、結婚でもない。高学歴、多くの就業機会、寿命の延長が女性に新しい役割と期待を与えるため、彼女たちは自動的に主婦にはならない。女性は中年以降にも健康を期待できる。将来は、更年期は、それまでの普通の活動の終わりや高齢期の始まりとはもはや見られなくなるだろう。

Engel, Nancy Sharts

Menopausal stage, current life change, attitudes toward women's roles, and perceived health status

Nursing Research, Vol. 36 No. 6, Nov-Dec, 1987, 353-357

更年期、最近の生活の変化、伝統的な女性の役割に対する態度が、40歳から55歳までの女性の健康に与える影響を検討した。LES, ISRO, PHS という調査が、249人の健康な女性に対して行われ、対象者は更年期前、更年期中、更年期後という3つのグループに等しく分けられた。全体的に、対象者はPHSでは比較的健康的であるという結果が出た。生活の変化についての得点は低く、初期にはほとんど変化がないということを示している。そしてISROの得点は、スケールの目的にあわせてクラスターに分けられた。結果は、更年期を週しての女性の発展として健康を認識するというこれまでの見方に反するものであった。

Figueiras, M. J.; Wartau, T. M.

Experiences of the Menopause: A Comparison between Portugal and the UK.

Journal of Reproductive and Infant Psychology, 1995, 13, 2, Apr-June, 93-100

ポルトガルとイギリスの女性の更年期の経験を比較するために質問紙調査によるデータを検討する。両国では、認知・報告される症状が明らかに異なっていた。英国女性は更年期を身体的・心理的变化と考える傾向があった。結果は、異なるヨーロッパ諸国での女性の地位と役割に関連した、更年期の社会的な見方について疑問を投げかけている。

Frey, Karen A.

Middle-Aged Women's Experience and Perceptions of Menopause.

Women and Health, 1981, 6, 1-2, spring-summer, 25-36

アイオワ州の40~61歳の女性に対し、一般的態度・身体症状・デモグラフィック要因についての調査を行った。78名の女性から得られた有重量の回答は、それらの要因間の関連性を検討するために用いられた。

Gannon, Linda; Ekstrom, Bonnie

Attitudes toward Menopause: The Influence of Sociocultural Paradigms

Psychology of Women Quarterly, 1993, 17, 3, Sept., 275-288

社会文化的パラダイムが、どのように個人の更年期に対する態度に影響しているのかを検討するため、大学生と地域住民に対して調査を行った(N=372,男女、18~87歳)。対象者によって表現された文脈を、医療問題、生活の変化、加齢のシンボルという3つのグループに分けた(おのおのが更年期を含んでいる)。結果は、医療については特に高齢の回答者において否定的態度であった。女性の態度は一般的に男性よりも肯定的で、高齢に

なることと経験をすることにより、より肯定的な態度を持つようになることが推測された。

George, Theresa

Canadian Sikh Women and Menopause: A Different View

International Journal of Sociology of the Family, 1988, 18, 2, autumn, 297-307

カナダの50名の中年の移民女性に対する参与観察とインタビューによって得られたデータを分析した。ここでは、更年期は重要な出来事として認識されており、更年期のタイミングはその正常性を測る要素であると信じられていた。更年期後の女性は社会では重要な地位にいた。更年期をストレスの多いものだと感じている女性はいなかった。反対に、更年期は女性をきれいなもの・自由なものにする最後の洗礼であると信じられていた。対象者には全て子どもがおり、更年期を彼女達の「義務」（子どもの出産）の終わりであるとする生物学的な印であると思っていた。更年期に対する肯定的な反応と、更年期に起こる身体的症状の真実に迫るアプローチが、これらの女性の生活の社会文化的文脈において検討されるべきである。

Gergen, Mary

Talking about menopause: a dialogic analysis

Thomas, L. Eugene (ed.)

Research on adulthood and aging: the human science approach

State University of New York Press, Albany, NY, 1989, 65-87

更年期に関連した出来事に注目したディスカッショングループの形態と機能を描くために、対話的な方法を使う。中心的な部分は、41歳から48歳までの8人の更年期前の女性から成るディスカッショングループについてである。ディスカッションは、3段階で発展しているようである。否定と更年期への反抗、グループとしての結合と抑制、そして見直しであり、それは更年期に直面する問題に対する最も良い処置を確認することに集中している。女性は、グループに参加することを通して彼女たち自身と彼女たちの将来について確認しているようだと言っている。

High, Robert V.; Marcellino, Patricia A.

Menopausal women and the work environment

Social Behavior and Personality, Vol. 22 No. 4, 1994, 347-353

女性が職場で直面する、更年期の結果として起こる困難について、更年期を過ぎた働く女性を調査した。89人の女性を対象とし、61%の女性が55歳以上であった。調査は、チェックオフの反応、症状の困難を測るためのリックカートタイプのスケール、職場における症状の影響についての質問を含み、職場環境の改善を提唱している。対象者は主に中流階級の女性連であった。すなわち、46%が管理職にあった。7割以上の女性が更年期中に睡眠中に汗をかくことなどを訴えていた。しかしながら、体重の減少、いらいら、うつ状態、むくみ、気分の変化などの症状を訴える女性も多かった。47%の女性が、症状のため生活の分裂状態を訴えており、30%の女性が、仕事に影響を受けたと答えている。症状を訴えた人のなかでは、いらいらすることと気分の変化が職業的成果に強い相関を持っていた。55%の女性が、更年期に上司からいくらかのサポートを受けたと答えた。多くの回答者は、職場における更年期についてのセミナーを提唱している。男性使用者は、女性を「彼女たちの居場所」に留めるもうひとつの理由として更年期症状を見ていたことが分かった。

Jackson, Jacquelyne Johnson; Walls, Bertram E.

Factors Affecting the Use of Physicians by Menopausal Black Women

Southern Sociological Society, Association Paper, 1977

更年期の態度と行動について、更年期を過ぎた黒人女性に対するインタビューのデータを使用する。この論文の目的は、心理的・社会的特性と更年期に関わる症状についての医者の言及の関連性についての仮説の検証である。サンプルの社会経済的地位は、アメリカ

の黒人女性の人口よりもやや上である。更年期症状のために医者の援助を得たか否かで女性をグループ分けし、それぞれ関連性のある要因について、統計的検定を用いて比較した。各々のグループは、次の点で差が見られた。①出産児数、②思春期の子の有無、③更年期に対する女性の恐れ、④予想されるうつ状態、⑤ほてり、いらいら、孤独感の存在、である。重回帰分析の結果は、孤独感、うつ状態、ほてり、婚姻状態等の独立変数が、約39%の確率で説明できるということを示している。今後の課題は、更年期の黒人女性に対するサポートを行いうるソーシャルネットワークに焦点を当てた研究がなされるべきだということである。

Jones, Jill

Embodied Meaning: Menopause and the Change of Life.

Social work in Health Care, 1994, 19, 3-4, 43-65

身体の性差に関する文化的な認知は、社会構造によって大きく規定されている。女性の身体構造は歴史を通じて変化してきたが、科学により、生物学的な視点に規定されて来た。この視点が、更年期を、うつ状態によって代表されるような生物学的イベントに変化させる医学的神話を生み出した。女性に更年期の経験について尋ねたインタビュー調査のデータを分析し、更年期の意味が医学的な神話にどのように従ったり対抗したりするのかを検討する。

Kaufert, Patricia A., and Margaret Lock

"What are women for?" Cultural constructions of menopausal women in Japan and Canada

Kerns, Virginia, and Judith K. Brown, eds.

In her prime: new views of middle-aged women, 2nd ed.

Urbana: University of Illinois Press, 1992

更年期女性についての日本とカナダで得られたデータを、文化的差異を調べるために比較した。3800人以上の40歳から59歳までの女性に対して、1980年代に調査を行った。ここでは、両国の医師が更年期女性と彼女たちの身体についての説明方法の比較を行う。その結果、日本の医師は、更年期女性について批判的であり、「更年期症候群 (menopausal syndrome)」は公式の医学的カテゴリーとなっている。カナダの医師は、更年期の女性は出産期の終わりということによって落ち込んでいると見ており、カウンセリングや精神薬の投与やホルモンセラピーが必要とみなしている。両国の中年期女性の間での詳細なデモグラフィックデータが報告されている。

Lennon, Mary Clare

The Psychological Consequences of Menopause. The Importance of Timing of a Life Stage Event.

Journal of Health and Social Behavior, 1982, 23, 4, Dec, 353-366

更年期が女性にとって心理的にストレスの多い出来事であるのかどうか、またどのような状況の下に起こるのかについて、1971~1975年に行われた全国的な Health & Nutrition Examination Survey から得たデータによって検討されている。重回帰分析の結果は、更年期が時期通りに起こる時に心理的ディストレスとは無関係であるという主な仮説を支持していた。しかしながら、更年期がライフコースの早い段階または遅い段階で起こる時に心理的ディストレスは続くかもしれない。これらの結果は、ライフイベントのタイミングは心理的衝撃に対する重要な要素であるという先行研究の示唆を支持していた。

Lennon, Mary Clare

Is menopause depressing? An investigation of three perspectives

Sex Roles, Vol.17 No.1-2, Jul, 1987, 1-16

更年期の常態とうつ症状の間の関連性について検討する。更年期の抑うつについての文

献において3つの見方が検討された。それは、更年期の生理学的変化が心理的ディストレスを増強する原因である、更年期は伝統的な女性の役割にある女性にとって最も落ち込むことである、そして更年期はほとんどの女性にとってそれほどうつになるようなものではない、という3つの見方である。これらの仮説は、2つの地域の調査(HANES, CMHA)データの分析によって検討される。調査対象者は、40歳から54歳までの527人の既婚女性である。学歴、収入、人種、職業的地位、親子における地位、年齢と更年期の相関が分析された。結果は、主婦と空の巣症候群の母親が、働いている女性や子どもが家にいる女性よりも更年期によるうつ状態に陥りやすいと言う仮説を支持しなかった。しかしながら、低学歴と低収入は、高いうつ状態に関連が見られた。結果はまた、更年期女性の高いうつ状態の生理学的な仮説を支持しなかった。代わりに、結果は、更年期の状態はうつ状態と関連が無いという仮説を最も良く支持した。

Lock, Margaret

Ambiguities of Aging: Japanese Experience and Perceptions of Menopause.
Culture, Medicine and Psychiatry, 1986, 10, 1, Mar, 23-46

45～55歳の1323名の日本人女性の健康と出産についての歴史を調査したものの部分的結果が、日本における更年期の経験の認識について議論するために使用される。これらのデータは、105名の女性に対する徹底的な補足調査と婦人科医・他の医療関係者・カウンセラーに対するインタビューから得られる結果によって補足されている。一般的に、加齢については注目されているが、特に更年期症候群について注目されていないという結果であった。カナダにおけるデータが比較のために載せられている。

Lock, Margaret

Encounters with aging: mythologies of menopause in Japan and North America
University of California Press, Berkeley, CA, 1993

更年期についての西洋の仮説を検証するために、日本と北アメリカの中年女性の医学的・政策的な意味を比較する。民族誌、インタビュー、統計、歴史的そして大衆的、医学的文献を用いて、中年の日本人女性の生活を明らかにする。著者は、中年期の女性に関連している経験と意味(内分泌学的な変化でさえ)は、世界共通のものでは全くないと結論づけた。北アメリカでは、更年期そのものに関心があるが、日本では中年女性が高齢者のケアにおいて果たす役割に注目している。閉経についてはあまり重要視されず、それは普通、加齢の過程における普通のこととみなされ、身体の減退や情緒的不安定のような病的な状態であるとは思われていない。中年期の症状でさえ異なっている。例えば、日本人女性はほてりをほとんど報告していないが、頻繁な肩こりを感じている。広範な参考文献があげられている。

MacPherson, Kathleen I.

Dilemmas of participant-observation in a menopause collective
Reinharz, Shulamit (ed.); Rowles, Graham D. (ed.)

Qualitative gerontology

Springer-Verlag, New York, NY, and Berlin, Germany, 1988, 184-196

自助グループや女性の活動的な組織である更年期集団の機能を述べる。更年期の医学的イデオロギーとは反対に、更年期は女性の加齢の普通の側面であり、病気ではないと主張する。集団は、更年期の自助グループを地域社会に提供し、調査を行い、高齢女性の健康について書いたりするために共に働く、7人から10人のコアグループから成っている。グループのメンバーとして、調査者はメンバーと調査者という2つの役割を持つことに葛藤を覚える。このような葛藤は、集団といくらかの距離を置く必要性を示している。長所は、調査がグループのサポートをすることであり、グループの問題についての調査者の洞察を含め、グループのアイデンティティーが強化されると言う点である。

McKinlay, Sonja; Jefferys, Margot; Thompson, Barbara
An Investigation of Age at Menopause.
Journal of Biosocial Science, 1972, 4, 2, Aor, 161-173

1965年にロンドンとその近くに住む45歳から54歳までの736名の女性に対する調査結果が、更年期（最後の月経）に着目して分析された。自然な更年期の起こる年齢は50～78歳であった。本調査と先行研究において使われた尺度の妥当性とデータの信頼性が検討されている。結果は、更年期の起こる年齢は平均年齢よりも可変的であり、最近更年期の年齢が上昇してきたという証拠はなかった。更年期は、未婚女性や離婚女性よりも既婚女性が明らかに時期が遅くなっている。更年期と初潮の時期と社会経済的地位の間に目立った関連は見られなかった。

Metz, Michael E.; Miner, Michael H.
Male "menopause," aging, and sexual function: a review
Sexuality and Disability, 1995 winter, 13, 4, 287-307

男性の加齢につれて起こる生理学的・心理学的変化についての主な文献を見直し、そのような変化が男性の性的機能に与える影響について検討する。重要な身体的・社会心理学的変化は、中高年の間に、男性にとって発達的に起こる。多くの研究が、男性ホルモンと加齢の過程の間の関係を報告している一方で、現在の最も強い科学的な証拠は、男性に生物学的な更年期が存在することを支持していない。高齢男性の間の性的な問題が病的なものであるか否かに関わらず、気楽な処置（性生活改良療法など）、適度におしつけがましい処置から非常におしつけがましい処置（性器の植え付けなど）の範囲で適した処置が増加しつつある。心理的性療法（psychological sex therapy）はまた、男性とそのパートナーが性交渉の質を高めるのを手伝うときに、重要な要因として認識されている。加齢についての幸福感のいくつかの異なったレベルを概念化するための単純なモデルが提案されている。セクシャリティを通して親密な感情を得るのに加え、男性は情緒的、精神的、感覚的な形で、肉体的な親密を高める機会を持つ。

Theisen, S. Carol; Mansfield, Phyllis Kernoff; Seery Brenda L.; Voda, Ann
Predictors of Midlife Women's Attitudes toward Menopause.
Health Values, 1995, 19, 3, May-June, 22-31

35～55歳の287名の中年女性の更年期に対する態度と関連要因を、Bowlesの更年期態度スケールに対する回答に基づいて評価した。回帰分析により、更年期の態度に関連する要因として、婚姻状態、情緒的健康、更年期についての討論の容易さ、更年期について話せる家族の人数、更年期に関わる変化、が挙げられた。中年女性の更年期の移行を促進するための女性中心のヘルスケアの戦略について討論されている。

Wilbur, JoEllen; Miller, Arlene; Montgomery, Andrew
The Influence of Demographic Characteristics, Menopausal Status, and Symptoms on Women's Attitudes toward Menopause
Women and Health, 1995, 23, 3, 19-39

中年女性の更年期に対する態度に与えるデモグラフィック要因と更年期の時期の影響について検討する。35歳から65歳までの149人の女性に対して調査を行った。エスニシティや社会経済的地位に関わらずほとんどの女性は、更年期に対して中立的な感情を持っていた。更年期後の女性は最も肯定的な態度を持っていた。否定的な態度は、心理的兆候と関連があった。

4. その他

(1) ホルモン療法

Bush, Catherine M.; Zonderman, Alan B.; Costa, Paul T., Jr.

Menopausal transition and psychological distress in a nationally representative sample: is menopause associated with psychological distress?

Journal of Aging and Health, Vol.6 No.2, May, 1994

女性がホルモン療法を決めるための助けになる情報を提供しており、また、月経前症候群（PMS）、更年期、骨粗鬆症に対処するための様々な戦略を載せている。栄養学的な視点から女性の健康について明らかにし、以下に記す戦略の長所と短所を記している。エストロゲン療法（これについては危険であるという意見に注目する）、ホルモン療法に加えての統合的な黄体ホルモン及び普通の黄体ホルモンに加えたホルモン療法のうち、特別な食事と共に、普通の黄体ホルモンを支持している。食生活が更年期に関するホルモンのアンバランスにどのように影響しうるかの多くの例が載せられており、植物性のエストロゲンを含む大豆の産物の摂取量がアメリカ人女性より多い日本人女性は、ほてりをあまり訴えないということを示している。骨粗鬆症とカルシウム摂取量、カルシウム供給剤の使用、カルシウムの吸収と骨粗鬆症との関係、自己養生法としての食事療法のついても記している。

Padonu, Georgia; Holmes-Rovner, Margret; Rothert, Marilyn; Schmitt, Neal; Kroll, Jill; Rovner, David; Talarczyk, Geraldine; Breer, Lynn; Ransom, Sharon; Gladney, Evelyn

African-American Women's Perception of Menopause

American Journal of Health Behavior, 1996, 20, 4, July-Aug, 242-251

更年期とホルモン療法に関する認識と実践について述べている。55人のアフリカ人女性に対するインタビューと質問紙調査を行った。更年期は年齢と関係する自然な出来事であると認識されていた。ホルモン療法は、がんを引き起こす恐れから否定的に捉えられていた。書物と他の女性が、更年期についての情報源であった。

(2) 男性更年期

McFadden, Cyra

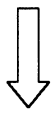
Is there really a male menopause?

New choices for Retirement Living, Vol.34 No.6, Jul-Aug, 1994

中年男性の身体的・精神的な変化という点で男性に更年期が存在するのだろうか。著者は、男性の更年期（中年男性の危機と呼ぶ）が存在するという事に少しも疑いを持たない45歳から70歳までの12人の男性に対してインタビューを行った。男性は、40代後半から男性ホルモンであるテストステロンの分泌が減少するが、その減退は、女性における更年期とは比較することができない。このように、生物学によって男性の中年期の危機を説明することができない。男性の中年期の危機について社会的に広く知られているということが、男性にそれを認識させる。インタビューを受けた男性では、心理学的変化（内省的傾向からパニックまで）が、どんな身体的変化よりも重要であった。糖尿病や心臓病のような生理的な変化はうつによって認知され、それは性に関する活力を減退させる。ヨーロッパで広がった男性に対するホルモン療法は、アメリカにおいても浸透しつつある。この療法は生殖能力を高めるかも知れないが、前立腺がんや心臓病にかかるリスクも高める。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



以下に挙げる文献は、Abstracts in Social Gerontology (the National Council on the Aging, Inc, SAGE Periodicals Press, Vol.33~39,1990~1996) と age network の検索によって得られたものである。文献の大部分が医学的なものであったが、ここでは主に、社会科学的文献を収録する。社会科学的文献は全体のほぼ3分の1である。